

緑内障について

緑内障とは、眼球でとらえた像を脳に伝える視神経が障害され、視野（見える範囲）の中に見えない部分ができたり、視野が狭くなる病気です。40歳以上で5%、60歳以上では1割以上の患者がいます。多くの緑内障の進行は非常にゆっくりで初期はあまりはっきりした症状が現れないことがほとんどなので、患者自身が病気に気付かないまま視野が欠けていってしまうことが少なくありません。また、片方の眼だけに症状が現れた場合には、もう片方の視野で補ってしまうために自覚できないことも多くあります。治療が遅れると失明に至ることもありますので、よく見えていても定期的に眼底検査を受けて早期発見することが重要です。

ほとんどの緑内障は確実な原因はわかりませんが、原因がわからない緑内障は原発性緑内障と呼ばれます。原因がわかっている緑内障は続発性緑内障と呼ばれ、その原因としては、感染症、炎症、腫瘍、大きな白内障、白内障の手術、薬、その他の病気などがあります。これ

らの原因により眼の中の液体（房水）が眼から自由に排出されなくなると、眼圧が上昇します。目の硬さである『眼圧』が高い状態が続くと眼の奥についている視神経が障害され緑内障となります。眼圧は10～20mmHgが正常範囲とされていますので、20mmHgを大きく超えるような眼圧が続くと視神経が障害される可能性が高くなります。しかし眼圧が高くないに人にも緑内障が少なくないことから、眼圧以外の原因として視神経が弱い、血流が少ない、視神経に悪影響を及ぼす物質が存在する、免疫の異常などいろいろ考えられていますが、どれも確実な証拠は見つかっていません。

障害された視神経を回復する方法は確立されておらず、早期に発見し、点眼薬などにより眼圧を下げ続けることが大切です。適切な治療を開始、継続することで緑内障の進行を抑えることができます。

緑内障の早期発見のためにも、40歳を過ぎたら年に1回程度の眼底の定期検査を受けることをおすすめします。

